

ふれっと

【ひろがれ、かさなれ、むさしののわ】

2021
第54号



特集

視覚障害者生活支援員って

どんな仕事？

武蔵野市の視覚障害者支援

●トピックス

しむべとくリウブドファンディングご報告

●食を通じて地域がつながる

地元で採れた野菜をご提供

●たて糸よこ糸

4 chu-café のお

●えさぶれっそ

認知症相談を通して学んだこと

川上ちひろ

グループホームでの生活

斎藤いりえ

●笑門来福

変わるもの、変わらないもの

特集

視覚障害者生活支援員って どんな仕事？

武蔵野市の視覚障害者支援

視覚障害とは

視覚障害とは、何らかの理由により、メガネやコンタクトレンズで矯正しても視力があがらない状態や、見える部分が狭くなるなどして、生活に支障が出る状態のことです。視覚障害による不便さは、人の顔が見えない、読みたい文字が見えない、風景が見えない、足元の階段が見えないなど、つまり「見たいものが見えないこと」です。

では何もできないのかというと、そんなことはありません。見えないものを見ることはできませんが、触ること、聞くこと、においや空気の流れでわかること……。何気なく話していてもお互いの感情は伝わるもので、「見えないことで見えてくるものが多い」と当事者の皆さまからよく聞かれる言葉です。

視覚障害者生活支援員とは

視覚障害のある方を支援する仕事です。視覚障害のある方へ、ひとりですくための白杖の使い方や、家中で家具にぶつからず安全に移動する方法、パソコンや点字をつかってコミュニケーションをとる方法、安全な調理方法など、日常生活を送るうえで必要な動作

や技能をお伝えします。

「視覚障害者生活支援員」は国家資格ではありませんが、日本に30万人ともいわれる視覚障害のある方にとって必要とされている専門職です。しかし、日本には養成機関が2つしかなく、いまだ就業者も非常に少ないのが現状です。県によってはひとりもないところもあり、東京都の市区町村レベルが常勤で配置しているのは特別区では2区のみ、多摩地域では武蔵野市だけです。当法人が武蔵野市から指定管理を受け運営する「武蔵野市障害者福祉センター」に配置されています。



白杖

点字教室



武蔵野市障害者福祉センターの点字教室。点字は見えなくなったら自然と使えるようになるものではありません。当事者は新しい言語を学ぶようにコツコツと習得されています。情報交換の場にもなっています

同行

同行援護従業者養成研修

ガイドヘルパーは、正式には同行援護従業者といわれていて、外出時の誘導や、様々な視覚情報についての支援を担う、視覚障害者にとって最も身近な支援者です。安心安全に誘導をする、ご利用者の命を守る大切なお仕事です。同行援護従業者になるには、国で定められた5日間の研修を受ける必要があります。

毎年10月頃、障害者福祉課の運営により養成研修を行っています。講師を務めるだけでなく、新しい担当職員でもスムーズに研修を運営できるよう、スタッフの役割なども含め詳細に打ち合わせを行い、充実した研修になるよう協力体制をとっています。

研修を終えた方が、一人でも多く従業者として、視覚障害のある方の支援の輪に加わってもらえるようお願いばかりです。

拡大読書器



日常生活用具のひとつ、拡大読書器。カメラで撮影した映像をモニターに大きく表示します。視力が低下した方も本や写真、大切な書類などが見られるようになる便利な道具です



視覚障害者生活支援員としての モットーや大切にしていること

武蔵野市障害者福祉センター
視覚障害者生活支援員 **やだ ゆうこ** 箭田 裕子

視覚障害のある方が武蔵野市内で視覚障害者生活支援員と初めて出会うのは、障害者手帳が交付されることで、市役所の担当者とともに会う面談であることが多くなっています。このとき「見えない・見えにくいことで困ったことがあったら何でも相談してください」と必ず伝えるようにしています。何か不便に思うことがあったら「この人に聞けばいいんだ」と思っていたら、とがまず重要です。

もちろん、すでに困りごとが具体的にあり、支援を必要とされている方にはすぐに積極的な関わりを始めます。ただ、手帳交付時点ではご本人が支援の必要性をあまり感じていないことがあります。その場合も、より見えにくくなった、家族の状況が変わったなどの何らかの変化が生じ、時間がたつてから相談にお見えになることもあります。そんなときには、補装具・日常生活用具の導入や必要な訓練などについて、ご本人と一緒に考えてみます。

実際に、手帳取得から数年経過して見えにくさが増し、夜間歩くときに不安が出てきた、という方がいらっしや

いました。このケースでは、白杖とその方の見え方を有効に使って安全に歩く方法を伝えるために、夜間歩行訓練を行いました。

相談にのるなかで、日常のどんな場面で不便を感じているのか、訓練を受けた期間など、ご本人の希望を具体化していきます。視覚障害のある方の生活は、ちょっとした知識や工夫でできるが増えます。しかし、ご本人が最初から困りごとを解消する便利な道具や方法をご存じかという点、そうではありません。相談支援や訓練をお伝えするのが私たち専門職の役割なのです。

障害者福祉センターは、市役所窓口よりも相談するハードルが少し高くなっているように思います。「支援員に相談する」ということは、自分の障害を認めることになるので抵抗があった」という声も聞かれました。振り返ってみると、中途障害

の方へ繊細な対応ができなかったこともありました。視覚障害者生活支援員は「必要ときに利用する道具と同じ」と考えていただき、必要なときには遠慮せずにご利用いただければと思います。これからも、皆様と同じ地域の中で、日々学びながら支援にあたりたいと思います。



家電品には、どこに必要なスイッチがあるかすぐにわかるように凸シールを貼っています

◀武蔵野プレイス前の点字ブロック。視覚障害者生活支援員は市役所の理学療法士とともに、道路管理や工事の担当者と連携を取り、誰にとっても歩きやすい街づくりのための助言を行っています

支援を受けての感想



Aさん

急に見えなくなって、もう何もできないと思っていました。初めて支援員が面接に来たとき、「見えなくてもできますよ」と言われて、そんなわけがないと思ったけれど、やってみたらできたんです。本当に見えなくてもできるんだ、と思ったところが私の原点です。その後は、家事を工夫しながらやったり、点字を学んだり、スポーツをしたり、とやってきたのが今の自分です。

見えなくなり、脳梗塞で言葉も出にくくなったけれど、点字を学び、失ったと思っていた文字に触れる楽しみを得ることができました。最近では「奥の細道」を読めるようになったことで、生活が変わりました。せっかくの「奥の細道」なので暗唱したいけれど、記憶障害もあり、読んでもすぐ忘れてしまいますが、一日のうち「この時間は必ず読もう」と思って毎日努力するようになりました。



Bさん



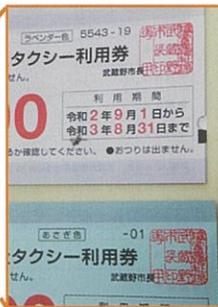
Cさん

以前住んでいた地区の入所型の訓練施設で、日常生活訓練や職業訓練を受けたけれど、白杖歩行訓練だけやらなかったのが、ずっと一人歩きはしていませんでした。武蔵野市に転入してきたら視覚障害者生活支援員が地域にいて、実際に住んでいるところで歩行訓練を受けることができ、最寄り駅まで行けるようになりました。駅員に電車から電車へと乗り継ぎを頼んでどこでも行けるようになり、子どものころからの夢だった海外旅行にも友人と一緒に行くことができました。



こんなところに視覚障害者生活支援員

～視覚障害のある方への情報保障～



最近では印刷物にも、高齢者や色弱の方にとって見やすいものをという配慮が求められています。武蔵野市障害者福祉センターの視覚障害者生活支援員には、武蔵野市役所から様々な印刷物について相談が来ます。例えば、毎年発行されるタクシー券です（写真参照）。400円券と100円券が一冊つづりになったことがきっかけで、違いを区別できるよう助言を行いました。助言をもとに、タクシー券は見分けやすいよう配色し、色で見分けがつかない方のために色の名前が文字で記載されています。触って区別ができるように、100円券には切れ込みも入れてあります。

は切れ込みも入れてあります。

実は、今年度市内に配付された新型コロナワクチン接種券は、障害者手帳1級・2級の方の封筒には点字シールが貼ってありました。接種券のように、企画から発行まで非常に短期間で制作することが求められる印刷物であっても、誰もが平等に情報を得られる権利を保障するため、工夫が施されているのです。

見えにくいことでお困りのことなどありましたら お気軽にお問い合わせください

武蔵野市障害者福祉センターでは視覚障害のある方へ、視覚障害リハビリテーション訓練として以下のような支援を行っています。

- 白杖歩行訓練、点字訓練、音声パソコン訓練、日常生活動作訓練ほか
- 手帳交付の際の面談・諸々のサービスの説明、補装具や日常生活用具の紹介、見えにくいことでの不便さへの助言、調理・日常生活動作訓練など 生活状況に応じ対応

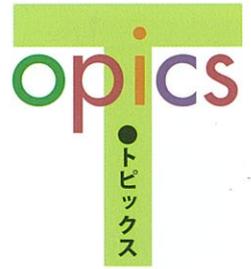


→地図
P.8-A

住所：武蔵野市障害者福祉センター 八幡町 4-28-13

電話：0422-55-3825 メール：subaru-eye@fuku-musashino.or.jp

担当：箭田 裕子



つむぐとクラウドファンディングご報告

→地図 P.8-B

緊急事態宣言が発令され、それに伴い三鷹駅にあるつむぐと店舗は休業。これまで参加してきたイベントの中止も相次ぎ、ご利用者の作品を社会に発信する機会がほとんどなくなってしまいました。そんなコロナ禍でも何かできることはないかと、あらたに挑戦した企画のひとつがクラウドファンディングです。運営資金を集めるだけでなく、ご利用者の活動や作品の魅力をいろいろな方に知ってもらい、つながりをひろげることが大きな目的でした。

支援総額50万円という目標を設定し、7月1日から8月14日の45日間で実施したところ、7月24日には目標を達成、ネフストチャレンジとして75万円にも挑戦しました。結果として、のべ97名の方からご支援を頂き、78万6千9百円の支援金が集まりました。この支援金は支援してくださった方へのリターン商品製作費、ご利用者

へのお給料、商品をブラッシュアップするための費用等に充てさせていただく予定です。

今回のクラウドファンディングを現実させるにあたって、ご支援して下さった皆さま、応援コメントを寄せて下さった関係者の方々、宣伝活動をして下さったご家族、地域の皆さまなど、多くのご協力を頂きました。小さくコツコツと活動してきたつむぐとの、たくさんのつながりと大きな力を感じた取り組みでした。皆さま、本当にありがとうございました!!

(デイセンター山びこ 佐藤 直子)



クラウドファンディング限定商品、ペパロニデザインに作成していただいたスニーカーと原画を描いた知久政也氏

食を通じて 地域とつながる

地元で採れた 野菜をご提供

● さくらごはん

→地図 P.8-C



畑を耕すメンバーの皆さん

武蔵野市役所8階のさくらごはんでは、地元野菜と友好都市食材を使用した食事を提供させていただいておりますが、昨年より新たに「武蔵野農業ふれあい村」の野菜が加わりました。

武蔵野農業ふれあい村は、都会に残された貴重な農地を活用し、武蔵野市民の方に農業にふれあう機会を提供するため、市内関前5丁目の農地ほか数か所で野菜を栽培しています。小学生が野菜栽培に挑戦する「子供のための農業体験教室」なども実施する等、精力的に活動されています。さくらごはんもご縁があつて市役所から比較的近い緑町の「ふれあい村農園」で採れた野菜を店頭で販売させていただいています。この夏はピーマン、ミニトマト、

ナスなど元気な野菜が並び大いに賑わいました。

この新鮮で元気な野菜が武蔵野の地でのように育ち収穫されているのか興味を湧かせてきたため、ふれあい村農園にお邪魔させていただきました。住宅街の中、想像もつかない所に農地がありメンバーのみなさんが暑さに負けず笑顔で一生懸命作業されていました。この日はピーマンが全盛で、深々とした緑の元気なものがたくさんなっていました。

地元産の元気な野菜たちを、これからもさくらごはんを通して市民の皆様にご提供できればと思います。

ワークセンター(けやき)さくらごはん

小川 託矢

よりよい地域づくりを
めざして活動している
団体等を紹介します。

たて糸 よこ糸

4chu-caféの会

4chu-caféの会
代表 浅野 晴美

LINE: 



中学生のための自習スペース@わくらすの活動風景

わくらす武蔵野の地下1階にある、オリブホールで開かれる「中学生のための自習スペース@わくらす」は、中学生が放課後にフラッと立ち寄り、のんびり過ごせる場所として、定期テスト前を中心に開催されています。主催している4chu-caféの会代表の浅野さんは、立ち上げの理由をこう話します。「地域の小学生には、学童や『地域こども館あそべ



4chu-caféの会のスタッフ（一部）。
右から2番目が代表の浅野晴美さん

え」などがありますが、中学生になると放課後に気軽に行ける場所がなくなってしまう。地域の中学生たちが、自分の家でも学校でもなく、ありのままの自分でくつろげる第3の場所を作りたいと思いました。そこで、第四中学校の元PTA役員を中心に、地域で同じ想いを抱く有志が集まって立ち上げたのが4chu-caféの会です」。

その名の通り、元々の計画では中学生が気軽に立ち寄って、お茶を飲みながらくつろげるカフェをオープンする予定でした。そんな折にコロナ禍になってしまい、飲食の企画が難しくなりました。「コロナ禍でも子どもたちが出かけやすいのはどんな場所だろう」と考えて、静かで涼しい場所で勉強ができる自習スペースから始めることになりました。

当法人のわくらす武蔵野がその開催場所を選ばれたのは、志を共にする運命的な出会いだったと浅野さんは話します。「4chu-caféのために場所を貸していただきたいといういろいろな場所をお願いに行ったのですが、どこもコロナを理由に断られてしまった

んです。でもわくらす武蔵野の施設長さんは私たちの想いを聞いてくださって、『素敵な活動ですから、是非使ってください』と行ってくださいました。もう、涙が出るほど嬉しかったです」。

手探りでスタートした自習スペースでしたが、初回に来てくれた子どもたちが「楽しかった」「来てよかった」と言ってくれたこと、そして、お迎えに来た保護者が「こんな良い所があったんだ!」と言ってくださったことが、自信につながりました。

こうしてコロナ禍という特殊な環境で、まずは自習室としてスタートした4chu-caféですが、やはり将来的には、カフェやくつろぎの交流スペースとしてより活発に活動したいと考えています。4chu-caféの会のメンバーには、子育てを終えて時間にゆとりがある経験豊富な人から、つい最近まで中学生を育てていた人まで、様々な年代の人がいます。そんな、親や先生ではない、地域の大人たちとの何気ない会話で、「ふーん、あなたはそんな風に考えるのね」とありのままを受け止めてもらえる経験を地域の子どもたちに提供したいと浅野さんは考えています。「そしていざれば、わくらすのご利用者にもお手伝いしていただいて、地域の子どもたちにご利用者の交流の機会を生み出すなど、子どもたちの世界をより広げることができるところになっていけたらと考えています」。

「コロナが落ち着いた先に広がる、4chu-caféの会の未来と共に地域福祉に貢献していきたいです」。

（聞き手 わくらす武蔵野 木引 大輔）

認知症相談を通して
学んだこと

桜堤ケアハウス

川上 ちひろ

→地図
P.8-D

武蔵野市では認知症相談という事業を月3回行っています。豊富な相談経験のある専門の相談員が、認知症への不安を抱えているご本人や介護されているご家族へ、心のケアや介護等に関する対応方法などについて、具体的なアドバイスをしてくれます。在宅介護・



私も担当ケースの相談にのってもらっています！
(筆者右)

地域包括支援センター職員も、継続的な相談支援のために同席しています。

私も以前、ご家族の対応に怒ってしまった。ご本人へのかかり方に関する相談の場に同席させていただきました。相談員がご本人の性格や生活背景から「ご家族には弱った姿を見せたくない」と考えているのではないかとアドバイスをしていました。その話を伺ったとき、「介護者側の意図だけではなく、ご本人の立場や気持ちもきちんと考えてかかわっていくこと」の大切さに改めて気づかされました。以前勤めていた医療機関でも認知症の方との接点は多く、「なぜこちらの意図が伝わらないのだろう」と悩む事もありました。今思うと、ご本人の立場や気持ちに寄り添えていなかったのではないかと思います。

今後はこの経験を活かし、地域の総合相談窓口として、認知症高齢者を支えるご家族や地域の方々にとって少しでも心の拠り所となるよう、常に心がけて業務に取り組みたいと思います。

グループホームでの生活

グループホームかしの木

斎藤 いりえ

→地図
P.8-E

グループホームでの生活は、ご自身の生活と他のご利用者の生活が共有スペースで重なります。ご自宅のご家族との生活や日中活動支援の場とは違う関係が生じるのです。そのため些細なできごとが、ご利用者同士のトラブルの原因となることもありました。



かしの木へのご帰宅をお出迎えています
(筆者左)

一方で、ご利用者の気づかいが互いにより影響をもたらすシーンも共同生活ならではのものです。ある方は一緒に暮らす方の表情や行動を気にかけて、場所をゆずってくれたり、ものをどかしてくれたり、相手に対する気配りを見せてくださいます。職員が先回りし、ご利用者を苦手な刺激から完全に守る環境を作ることできませんが、それはご利用者の自発的な行動やコミュニケーションの機会を奪ってしまうことにつながりかねません。かしの木での生活では、お一人おひとりの生活スタイルを尊重することを前提に、一緒に暮らす方との調和も大切にしたいからと願って支援をしています。

これからも、ただ安心安全だけを追求するだけでなく、ご利用者のチャレンジや可能性も大切にしながら、そのバランスを見極め、ご利用者の生活の向上に努めていきたいと思っています。

